

横井小楠の国際平和論

—同志社国際主義の原点を求めて

講演	沖田 行司〔おきた・ゆくじ〕
講師紹介	同志社大学社会学部教授 〔研究テーマ〕日本人の人間形成と伝統文化の関係を解明する

はじめに

時代が大きく変わろうとすると、それまで社会を支えてきた組織やその原理が揺らぎ、人間の意識もそれらに伴って変化する。その結果、人間関係のあり方や道徳観など、さまざまな価値観が変容してゆく。こうした変化を、人間にとって好ましい方向へと創造する営みの一つに教育がある。私たちが存在する現代社会も大きな変化の波が押し寄せている。「グローバル化」という言葉に代表される変化がそれである。地球的規模である変化が生じている。それに即応した改革が求められているのである。一昔前までは「国際化」という言葉が用いられていたが、「グローバル化」の前に、すっかり姿を消してしまったようである。

日本の大学も、こうしたなかで大きな改革を余儀なくされている。しかし、多くの場合、国際競争力に打ち勝つ人材の養成であり、そのために学問や教育の質を高める教育改革が求められているのである。キリスト教主義を建学の精神とする同志社大学の国際主義は、はたしてそれらを無批判に受け入れていいものであろうか。歴史をさかのぼって、国際化の系譜を辿りながら考えてみたい。

19世紀中ごろから西洋諸国が日本の近海に出現し、日本の鎖国政策を批判して開国を迫るようになった。新しい時代に向けてさまざまな改革が構想された。この時期を幕末と称している。旧い世界が崩壊してゆくなかで、青年たちは新しい時代を切り拓くべく、さまざまな領域での挑戦を試みる。しかし、旧い世界に執着して、これを維持しようとする保守的な世代との激しい対立を通して、絶え間ない努力が払われた。その代償に命を賭け、短い青春の幕を閉じた若者も少なくはなかった。藩の学校でエリートとしての教育を受けた青年のなかには、既成の学問や教育に対して異議を申し立て、エリートであったがゆえに敢えて時代を切り拓く困難な道を選ぶ者もいた。熊本藩に生まれた横井（よこい）小楠（しょうなん）もそうした青年の一人であった。開国を国際平和の実現と位置づけた横井小楠の儒学は富国強兵を目指す当時の日本には受け入れられなかったが、小楠の教えを受けた人びとの第二世代の青年たちが熊本郊外の花岡山でキリスト者としての誓いを立て、創立して間もない同志社に大学して入学した。新島襄に学び、同志社の国際主義に尽力した多くの逸材を輩出した。横井小楠の思想が手がかりとして、その国際主義の特質を明らかにしたい。

1. 立志と実学思想

横井小楠は1809（文化6）年に熊本藩の150石の藩士の次男として生まれた。長男相続が原則の武家社会において、次男に生まれたことは小楠の人生を大きく決定づけた。幕末になると諸藩では藩校を開設し、人材養成に力を入れていた。つまり、能力によって、新しい人生が開ける時代が到来したのであった。

熊本藩が設立した時習館は制度的にも江戸時代の藩校を代表する教育機関であり、今日の大学院に相当する居寮生制度も設置していた。しかし、当時の時習館の学問は、中国の法制度と実践性の乏しい朱子学を中心とするものであった。小楠は学問をする心構えを次のように漢詩に託している。

天地の為に志を立て、生民の為に命を立つ。往聖の為に絶学を継ぎ、万世の為に太平を開く。学者発心の初め、須らく此の大志願を立つべし（原漢文）。

学問をする際の志を説いたもので、天地に向かって大きな志を立て、為政者として農工商の為に使命をいただき、かつて聖人が確立して今は継承されなくなった学問を受け継ぎ、平和な時代が続くための基を立てることが目的であった。江戸に留学した小楠は、そこで藤田東湖など水戸藩の人びとと出会い、視野を広げていくとともに、後に勝海舟が「横井の舌剣」と評したように、藩や幕府の政治などを鋭く批判したことが熊本藩にも伝わり、酒の上での失敗を理由に帰国謹慎を命じられた。

小楠は時習館で頭角を現し、藩のエリートが集まる居寮生のなかで、扶持米（奨学金）が与えられる居寮長となり、将来を嘱望されていた。このまま何事もなく研究を続けていけば、時習館の教授などの途が開けるのであったが、彼の「大志願」はそれを許さなかった。小楠は仲間とともに、時習館を改革し、やがて学問を藩の政治に反映させようと考えた。藩の秀才が集まる居寮生を門閥や地位に基づく希望入寮から能力を主とした選抜制へと改革した。これとともに、時習館の学問を創設時の原点に立ち返り、重い税にあえぐ民を救う「実学」を追求すべきであると主張して、藩の保守派と鋭く対立した。

藩当局は小楠を江戸に留学させる形で、これらの運動を封じ込めようとした。これを栄転と理解する研究者もいるが、小楠のグループには奉行職や家老職の家柄の青年も多く、小楠を彼らから引き離すことが目的であった。江戸に留学した小楠は、そこで藤田東湖など水戸藩の人びとと出会い、視野を広げていくとともに、後に勝海舟が「横井の舌剣」と評したように、藩や幕府の政治などを鋭く批判したことが熊本藩にも伝わり、酒の上での失敗を理由に帰国謹慎を命じられた。

帰国した小楠は、かつての時習館改革派の人びとと実学研究会を主宰した。元田永孚（もとながざね）によれば、この研究会は「治国安民」という目的の下に、「利用厚生」を内容とするものであった。つまり、民衆の生活安定に役立つ学問を実学と称したのである。やがて、この実学研究会は家老職の長岡監物（ながおかけんもつ）を中心とする武士派グループと、横井小楠を中心とする、惣屋階層に属す豪農を中心とするグループに分かれていった。

小楠は読書の在り方においても「いま朱子を学ばんと思ひなば、朱子の学ぶところ如何と思ふべし。左なくして朱子の書に就くときは、全く朱子の奴隷也」と言い切った。つまり、朱子学を提唱した朱子の言葉を暗記するだけでなく、朱子が懐（いだ）いた問題意識までさかのぼって学ばなければならないというのである。そこには当時の農民が置かれていた現状を見つめる鋭い主体意識の覚醒が見られる。小楠はこうした学問を「現在天帝を敬し、現在此天工を亮る経綸」と呼んだ。この宇宙の主宰者である天帝の計らいを助ける学問というように、実学には超越的・倫理的な性格が付与される。単に誰かの利益になる、役に立つ学問ではなかった。

小楠の見識は熊本藩では受け入れられなかったが、やがてその名声は全国に広がり、吉田松陰や坂本龍馬など、幕末に活躍する人びとも教えを求めた。小楠の見識を高く評価した越前福井藩の松平春嶽（まつだいらしゅんがく）（慶永（よしなが））は政治顧問として小楠を招聘しようとしたが、熊本藩の強い抵抗にあった。しかし、春嶽の強い要望もあって、小楠は福井藩に赴き、藩政改革などを指導した。また幕府の政治総裁に就任した松平春嶽を補佐して幕政改革にも参画した。

2. 学校とは何か

このような縁で小楠は福井藩の藩校創設に関する助言を依頼された。天保期を境に、諸藩では藩政改革の一環として藩校の創設もしくは改革に着手する傾向が強まってくる。この時期の学校論の特質は、実学主義・人材登用論・学政一致論を骨子として、現実から遊離した学問を藩政と直結した人材養成にあった。小楠はこのような学問の政治的・経済的効用を評価しつつ、そこに隠された人材養成の弊害に着目する。

小楠によれば、政治が学校教育に介入して一定の方向を与え、また教育も政治の求める人材教育を無批判に受け入れたならば、人材を育てて社会の用に立てようとする教育は安易な形で若い学生の心を占拠し、自分こそ有用な人材として拔擢されようとして、教育・学問の根本である「着実為己」という人格陶冶（人物養成）を軽視し、やがては非教育的な競争の原理が学校を支配して、学校はお互いに悪口を言い合う「喧嘩場所」となってしまうというのである。また、才能ある者は自分の利益のために政治を利用しようとする考えをもつようになると指摘した。小楠はこのような人材教育を「人材の利政」と呼び、「人才を生育せんとして却て人才を害」ってしまう結果となると忠告する。小楠の考える学政一致は、学校が社会が求める人材を一方向的に養成する場とするのではなく、「己を修める」ことと「人を治める」こととを一致を図るような人物教育を意味したのである。その前提として、小楠は君主と臣下はお互いに戒め合い、家庭や社会のいたるところで善を勧め、悪を戒め過ちを反省する声が天下に満ちることが必要であると述べている。教育の明確な理念をもたずに、ただ政治の道具と考えたり、社会に必要な人材だけを求めようとする、そこで学が若い学生は自分のことしか考えない利己的な人間をつくる結果となり、かえって社会に害毒を流すことになると警鐘を鳴らした。

私たちは現在、学校改革の只中にいるが、ややもすると小楠が警告した「人材の利政」に傾斜しがちである。「社会に役立つ人材」には、厳しい国際競争に打ち勝つための知識と能力を養い、その報酬として豊かな生活を独占する人間を養成すること、社会的弱者のため共生・共存するために必要な助け合いの精神や他者を思いやる心をもった人間を養成することの二つの方向がある。どちらに比重をかけるのかは、その学校の教育理念によって異なる。

3. 天地公共の実理と開国

小楠の実学思想と学校論についてみてきたが、そうした発想はどちらかといえば、近代的な特質というよりは、民を重んじ徳を修める儒教本来の在り方を探るという伝統回帰的な方法に基づいている。このような思考方法が、時代を超えた発想を生み出した例として、小楠の開国論をあげておきたい。

小楠の対外意識は1853（嘉永6）年6月のペリー来航を契機として高揚する。小楠はペリーの来航時には、「江戸を必死の戦場と定め夷賊を壘粉（さいふん）に致し、我が神州之正気を天地の間に明に示さずんばあからず」と述べているように、水戸学的な攘夷意識をもって西洋のインパクトを受けとめている。しかし、その2ヵ月後には、川路聖謨（かわじとしあきら）に宛てた「夷虜応接大意」によれば、「凡我国の外夷に処するの国是たるや、有道の国は通信を許し無道の国は拒絶するの二ツ也」と述べて、条件付きの開国論に転じている。小楠が開国論に転じた理由は必ずしも明らかではないが、幕府がペリーの入国を事実上許可し、合衆国大統領の国書を受理したという既成事実を踏まえて、「有道の国」には開国を許すというように、西洋の「力の論理」よりも、さらに上位の価値概念で開国という現実を位置づけようとしていることに留意しておきたい。このように、儒教的な倫理概念を基準として西洋を判断する以上、当然西洋にも同様の倫理規範が妥当なものと思定しなければならぬ。具体的には、「天下」の概念が文字どおり地理的に拡大され、全世界をつつむものとなされ、「理」および「道」も世界の国家・社会を律する普遍性を帯びてくる。これに基づいて「有道無道を分たず一切拒絶するは天地公共の実理に暗して遂に信義を万国に失ふに至るもの必然の理也」というように、開国の基準を「天地公共の実理」においた。この「天地公共の実理」の下では、あらゆる国家も対等の関係となり、さらに対国家の次

元にとどまらず「華夷彼此の差別なく皆同じ人類にて候」というような人間平等意識に到達する。このような人間の平等意識に立脚して「信義を主として応接する時は彼又人也理に服せざる事不能」（「吉田悌蔵宛書簡」安政元年九月二十日）というように、対人間の関係で西洋をみる視座が形成される。これと同時に、「鎖国の旧習に泥み、理非を分たず一切に外国を拒絶して必戦せんとするは宴安に溺るるの徒」というように、攘夷派に対して批判的な立場をとるようになった。

1854（安政元）年、ペリーが再来日して日米和親条約を締結する頃になると、小楠は「水府之学一偏に落入り天地之正理を見不申処より、其流義之大節義を却て失ひ候様に罷成り、恐敷事に御座候」と、西洋拒否の立場を貫く水戸学を批判し、明白に開国を主張するようになった。小楠によれば、開国は「天地宇宙ノ道理」であり、西洋諸国は早くからこれに気付いていた。日本が「天地宇宙ノ道理」に基づいて開国政策を推進させることは、衰退した幕末の日本を回復させることにも通じると小楠は考えた。ここにおいて、小楠は「天地宇宙ノ道理」に基づいて開国を国とする西洋と日本との現実的な優劣関係を見てとった。

このような西洋諸国が支配する国際社会において、日本が国家的独立を維持し、存続しうための具体的な政策と同時に、理想的な原理（ナショナリズム）を明らかにすることが必要であった。それは西洋を相対化する原理であると同時に、世界に向けて普遍性を主張しうるものでなければならなかった。小楠は「天地公共の実理」もしくは「天地宇宙ノ道理」というような、普遍的性格を付与された概念に基づいて、ナショナリズムの論理を構築しようとした。この作業は、西洋文明の原理、つまり西洋を西洋たらしめている精神の発見と、それと儒教の原点である古代中国の「三代の治道」との同質性と異質性の認識を通しておこなわれた。

4. 西洋の原理としてのキリスト教

小楠は、西洋先進国の「治術」が明らかであるということと「励精能く上下の情を通じ、公に人材を撰び俊傑挙ぐ。事あらば衆に詢り、国論平なり。薄く税斂を征し、民貧ならず、厚く錢糧を貯え勁兵を養う」（原漢文）というように発見した。とりわけ「宇宙内の戦争を息る」、「智識を世界万国に取て治教を裨益する」、「全国の大統領の権柄賢に譲て子に伝へず、君臣の義を廃して一向公共和平を以て務」とするワシントン大統領以来のアメリカの政策や、「政体一に民情に本づき、官の行ふ処は大小となく必悉民に譲り、其便とする処に隨て其好まざる処を強ひず」とするイギリスなどに関しては、小楠は「政教悉く倫理によって生民の為にするに急ならざるはなし、殆三代の治教に符合するに至る」と述べ、西洋の長所と「三代の治道」との同質性を見いだしている。

西洋の政治や社会制度に「三代の治道」との類似点を発見した小楠は、そのような西洋文明を支える、いわば西洋の精神原理としてのキリスト教に着目した。小楠は「天主教之中流脈相分、『プロテスタント』教、『カトリック』教杯と申候て四五之脈有之」というように、新教と旧教とを区別していたようである。また、「全体耶穌にも八派ほど分れ候」とも述べているが、「其内西教と申すは尤も最近に起り、只今英・墨等の国に専ら流行」していると、「西教」に注目した。小楠によれば、「西教」とは「我天文之頃渡候吉支丹とは雲泥之相違」であり、「上は国主より下庶民に至る迄真実に其戒律を遵守いたし、政教一途に行候教法」であるというように、西洋の国家統合の原理であるとみた。これと同時に「大抵其学の法則は経義を講明するを第一とし、其国之法を明辨し其国之古今之事歴より天下万国之事情物産を究、天文・地理・航海之術及海陸之戦法・器械之得失を講究し、天地間之知識を集合するを以て學術といたし候」というように、「西教」は文明を創出する実学を併せもつものであった。

西洋の「力」は、キリスト教という精神的な原理に帰因すると認識した小楠は、いよいよ危機意識を深めていった。

西洋に正教あり。洋人自ら正教と称す其教上帝に本づき戒律以て人を導く。善を勧め悪辰を懲す。上下これを信奉す。教に因て法制を立て治教相い離れず。是を以て人奮励す。我に三教ありと雖も人心繫ぐ所なし。□（欠字）仏良く荒唐し、儒また文芸に落つ。政道と教法とは贖贖として其弊を見る。洋夷交りて港を進むに必ず貨利を以て曳く。人心は異教に溺れ、禁じ難きは是其勢なり。嗟呼唐虞の道、明白に朝露の如し。之を捨てて用いるを知らずんば、甘んじて西洋の隷と為る。世豈魯運なからんや。去りて東海を踏み躓れん（原漢文）。

日本には神道（明治以後に削除されて欠字となっている）や仏教、それに儒教があるが、いずれも西洋精神の原理であるキリスト教に対抗しうるものではなかった。このような状態で、西洋との接触が始まれば、西洋の支配を受けるのは必至であった。そこで小楠がキリスト教に対置したのが「三代の治道」であった。このように、国家を超越した普遍性を志向する理念をもって、西洋に対抗する思想原理としたところに、小楠のナショナリズムの特質がみられる。

5. 開国平和論

開国が攘夷かという二者択一的な政治論議に対して、小楠は「天地の気運と万国の形勢は人為を以て私する事を得ざれば、日本一国の私を以て鎖閉する事は勿論、たとひ交易を開きても鎖国の見を以て開く故開閉共に形のごとき弊害ありて長久の安全を得がたし」と主張した。つまり、開国は「世界公共の道」になかったものであり、人為ではどうすることもできない、「天地の気運」であった。したがって、それに逆って鎖国を固守するのは、日本の国家的エゴイズムに他ならなかった。しかも、国家的エゴイズムの立場をとる限り、たとえ開国したところで、それは「世界公共の実理」になかった真の開国とはほど遠いものであった。

小楠は甥の洋行に際して「堯舜孔子の道を明らかにし、西洋器械の術を盡す。何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん。大義を四海に布くのみ」（原漢文）という詩を贈っている。つまり、開国を富国強兵という国家目的に限定するのではなく、むしろ「三代の治道」を世界に実践しようとする契機と位置づけた。たとえば「今各国戦争ノ慘憺実二生民ノ不幸之ヲ聞ク二忍ヒス故二米國ト協議シテ以テ戦争ノ害ヲ除ク可キナリ」というように、世界の人民を戦災から救済し、戦争を地上から追放するという国際平和の実現も、開国の目的の一つとした。

小楠の政治思想も実学思想も、つきつめていけば、人間の倫理の問題と密接にかかわってくる。道徳や宗教からの解放によって、近代的な政治や学問の科学性が確立するとすれば、小楠の思惟様式の特徴はむしろ政治や学問の倫理的な命題を現実とのかかわりのなかで明確にしようとしたところにある。たとえば、小楠は実学が単なる技術として倫理から独立することによってもたらされる弊害について、西洋学を例にして次のように述べている。それによれば、西洋学は「心徳の学」ではなく、「事業の学」であったが故に、かくも容易に発達してきたというのである。そして、「心徳の学」（倫理学）に裏付けされていない「事業の学」（技術学）のもたらす結末について、次のように述べている。

其心徳の学無き故に人情に亘る事を知らず、交易談判も事実約束を詰るまでにて其詰る処ついに戦争となる。戦争となりても事実を詰めて又償金と好となる。人情を知らば戦争も停む可き道あるべし。華盛頓一人は此処に見識ありと見えたり。事実の学にて心徳の学なくしては西洋列国戦争の止む可き日なし。心徳の学ありて人情を知らば世に到りては戦争は止む可なり。

すなわち、利益の追求を目的とする「事業の学」は、やがては国家間の衝突を惹起（じゃっき）し、つまるところは戦争になるというのである。また、一度は「三代の治道」に類推して評価したキリスト教も、この「事業の学」の前にはその有効性を発揮することができず、「天守教の如きは西洋も本意とする事に非ず」という結論を出さざるをえなかった。西洋資本主義の下に発達した「事業の学」に対する小楠の批判は、とりもなおさず、アジアに向けて進出してきた西洋の帝国主義政策に対する批判ともなった。

経世論から発展した小楠の実学思想は熊本藩における豪農精神を反映することによって、封建経済の束縛から脱する方向を辿り、さらにキリスト教をはじめ、西洋の政治制度や社会諸制度の特徴を受けて、日本の封建的な政治意識を揚棄する可能性を孕んだ。しかしながら、1868（明治元）年に朝廷の召命を受けて上京した小楠は、その新たな思想の転回を待たずに、翌1869（明治2）年1月5日、京都御所の近くにおいて攘夷派の浪士の凶刃に斃れた。

おわりに

小楠が熊本藩で蒔いた種はやがて明治維新の後、小楠の弟子たちによる豪農実学党が受け継ぎ、熊本洋学校を創設して熊本の近代化に貢献した。熊本洋学校のお雇外国人として招かれたL・L・ジェーンズは、洋学校の学生に聖書の講義をし、熊本バンドと呼ばれるキリスト者を輩出した。熊本洋学校が閉鎖されることになったおり、L・L・ジェーンズは、京都で創設間もない同志社英学校を主宰していた新島襄にこれらの若者の未来を託した。海老名弾正や徳富蘇峰など、同志社の発展に寄与しただけでなく、近代日本の国際化に貢献した多くの人材を世に送り出した。熊本バンドには、横井小楠の長男である横井時雄も名を連ねていた。時雄は同志社の第一期生として卒業し、教会の牧師や同志社教授を経てエール大学に留学し、帰国して同志社の第三代目の社長（総長）に就任した。また、大正期に同志社の国際教育に尽力した原田助は熊本バンドの1年後に同じく熊本から同志社に入学してきた人物である。同志社の国際主義は、もちろん新島襄のキリスト教主義をその起源の主流とするのであるが、それらを支えたものとして横井小楠の国際平和論にも辿り着くのである。

グローバリゼーションの掛け声のもと、日本の大学が個性を喪失するなかで、同志社大学こそが、キリスト教主義に立脚し、熊本バンドの人びとが学んだ横井小楠の国際平和論を継承した独自のグローバリゼーションの理念を掲げ、世界に貢献する「人物養成」を目指さなければならないのではないかと。

【参考文献】

山崎正董『横井小楠』下巻 遺稿篇 明治書院 1938年
元田竹彦他編『元田永学文書』第1巻 元田文書研究会 1969年
沖田行司『新訂版 日本近代教育の思想史研究—国際化の思想系譜—』学術出版会 2007年